
男に成ったんだってヴァ！

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男に成ったんだってヴァ！

【Nコード】

N0472D

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

虐められっ子の女主人公・二宮成美は、自殺をしようとしていた所、学校のマドンナ・白石美緒に止められ、恋に落ちる。叶わぬ筈の恋なのに……——注：この粗筋は必ずしも役に立つとは限りません。

++プロローグ++（前書き）

イメージが湧いたんで書きました。更新頻度の遅い連載です。

++プロローグ++

私とその娘を好きになったのは、今から一月前の事だった。

クラスの子供たちに毎日の様に殴られ、蹴られて虐められていた私は、もう死のうかと思つた。

その日、私は学校の屋上のフェンスを乗り越えて縁に立つた。一歩でも前に足を出せば、即あの世逝きである。

「ダメーッ！」

声が聞こえた、後ろから。気のせいか。

「早まっちゃダメ！」

また聞こえた。先刻より近くで。

私は徐に後ろを顧みた。その先にいたのは、学校のマドンナ——白石^{しらいし} 美緒——だった。

「何が遭つたかは知らないけど、それだけは絶対ダメ！」

この娘、私が死ぬの、止めようとしているのか。

「余計な事しないで！私は死にたいの！生きていたって虐められるだけだから！」

「虐められているの？」

誰に——と彼女は私を疑問視した。

私は振り向き様に「あなたには関係無いわ！」そう叫んだ。

その瞬間、私は足を滑らせて転落した。

これで死ぬる——そう思つた。

だが私の体は、途中で宙吊り状態に成つて止まった。

浮いている！？

私はふと上、つまり足の方を見た。

彼女がフェンスを片手で掴んで自身を支え、もう片方の手で私の足首を掴んで、顔を引き攣らせている。

何この娘、危険を承知で私を？

「駄目、放して！あなたまで落ちちゃう！」

「折角拾った命、簡単に捨てるんじゃないわよ！」

言って彼女は、私を引き上げた。そして高く跳び上がり、空中で私を抱き抱え、フェンスを乗り越えて着地した。

凄い身体能力だ。

「あなたの事、助けてあげる」

「助ける？どうやって」

「先ずあなたが誰に虐められているのか教えて頂戴。話しはそれから」

私は彼女に話した。

何時から虐めに遭っていたのか、それを苦に自殺しようと思った事など全て。

「そっか、辛かったんだね。でももう大丈夫」

何が大丈夫な物か。他人事どういふだと思つて。

「私に任せなさい。そいつらの事、少し懲らしめてあげる」

えっ、懲らしめる？

私は何だか解らなかつたけど、この少女に賭けてみる事にした。それで巧く行かなければその時は本当に・・・。

*

放課後、私は校舎の裏で数人の男子に虐められていた。

身体中を殴られ、蹴られ、血だらけに成っている。

やっぱ死にたい———そう思つた時、彼女は現れた。

「アンタ達、止めないと許さないわよ！」

そう言つて、振り向いた男共に不意打ち。一瞬で彼らを気絶させた。

「手応え無いわね」

一体この娘、何者なの？

「大丈夫？」

彼女は地べたに座り込んでいる私に手を差し出した。
その時だった。私の胸の鼓動が高鳴ったのは。

何、この感覚？

「あ、有り難う・・・」

私は頬を赤らめ、彼女の手を掴んで立ち上がった。

「怪我、してるの？」

彼女は私の血だらけの体を見て言った。

「保健室行こう？ 手当してあげる」

私は無言で頷いた。

保健室に足を運び、彼女の手当を受ける。

その間、私はずっと考えていた。この胸のドキドキが何なのか。

その気持ちに気付いたのは、帰宅途中の事だった。

私は、あの娘が好きに成ってしまったのだ。しかしそれは叶わぬ恋。だけど、それでも構わない。ただジッと、その娘の事を傍で見詰めていられば。

*

帰り道、私は不思議なお店を見掛けた。

<あなたの恋叶えます>——店の側面にそう書かれている。

私はとても気に為り、そのお店へと入店した。

「いらっしやいませ」

とレジの前にいる男が私にお辞儀をした。

私はその男に声を掛ける。

「あの、恋を叶えるって、出会い系のアナログ版みた——」

途中まで言い掛けると、レジの男が遮る様に笑って言った。

「違うよ、うちはそんなじゃないよ」

「じゃあどんな所なんですか？」

「試してみる？」

男はニヤリと笑みを浮かべ、錠剤の様な物を取り出した。

「これは？」

「使用後の御楽しみだよ。今回は5,000円の所、特別に1,000円にしているよ。どうだい？」

「な、何だか分からないけど、これで恋が叶うと？」

「それはあなた次第です」

私は躊躇ったが、どんな物が気になったので、結局買ってしまった。

使い方は、寝る前に飲む、それだけ。翌日には効果が現れているそう。

効果範囲は自分とその家族及び身内である。

私は早速、自宅へ帰って買った怪しい薬を服用した。

途端、私の^{まぶた}瞼が重く成った。

私は部屋に行き、ベッドに潜り込んだ。

そうそう、忘れる所だった。私の名は、^{にのみや}二宮 成美だ。

Story 1・双子

雲一つ無い快晴。

その日、私は母・美野里^{みのり}に叩き起こされた。

全く、女の子を叩くなんてうちの親はどうかしてる。

「鳴海、早く起きなさい！遅刻するわよ！？」

五月蠅い婆だ———そう思いながら、私は体を起こした。

「全くあんたって子はどうして何時も起こさなきゃ起きないんだろ
うね。これじゃあ将来が心配だわ」

朝っぱらから五月蠅いしム力付く。

私が無言でベッドから降り、トイレに向かおうとすると、母が
こんな事を言った。

「それより鳴海、あんた今日、学校終わったら床屋行きなさいね。
女の子みたいな髪型じゃ母さん嫌だから」

何を言ってるんだこの人は？

「解った」

私は適当にあしらひ、トイレに入った。そして便座を下げ、パジ
ヤマのズボンとパンツを脱ぎ、腰掛けた。

あれ？———私は股間に違和感を感じ、そこに目をやった。

へっ、変な物がぶら下がっている！

その正体は男にしか付いていないアレだった。男子がよく息子と
か何とか言っている奴だ。

本物、なの哉？^{かな}

私は恐る恐る、それを触ってみた。

案の定それは、私の股間から生えていた。

私は咄嗟に立ち上がり、便座を持ち上げ、股間にぶら下がった一
物^{モツ}を便器に貯められた水に向けた。

これ一度やってみたかった。立ち小便って奴？

私は出る物を思いつ切り、水に向かつて吹っ飛ばした。

ジェット噴射の如く、それは前に飛んで見ずに落ちて黄色く染める。

気持ち良い、最高だ。

全て出し切ると、私はふと思った。

男も拭くのだろうか？

取り敢えず私は、紙を数回巻き取り、ぶら下がっている一物をそれで拭いて捨て、水を流してパンツとズボンを穿き、トイレを出て洗面所へ。

顔を洗う前に確認しておこう。

私は洗面台に備え付けられた鏡を覗いた。そこには、長髪のイケメン少年の姿をした私が写っている。どんな女でも魅了出来そうだ。でもそんなの関係無え。

私は水道から水を出して洗顔。冷たい水が眠気を一気に吹っ飛ばした。

水を止め、タオルで顔を拭く。

洗面所を離れ、リビングへ。

「御早う」

私はテーブルの椅子に座って新聞を読んでいる父・成なるかず一に挨拶をした。

私の名前”成美”は父の成と母の美から来ている。

父は新聞を退かし、挨拶を返すと、新聞に目を戻した。

食事の頃くらい新聞読むの止めるよ・・・。

私は内心そう思いながら椅子に座った。

目の前には白米、レタスが下敷きに成った目玉焼き、味噌汁と言

う朝食定番のメニューがある。

私は箸を取って「頂きます」と食事に手を伸ばした。

父は新聞を畳んで傍らに置き、私に声を掛けた。

「鳴海、お前に一寸相談があるんだが・・・」

私は父に顔を向けて「何、相談って？」と訊く。

「父さんな、今、次のネタで悩んでるんだ。そこでお前の知恵を貸

して欲しいんだ。お前、そう言うの考えるの得意だろ？」

うちの父は小説家だ。これまで幾つもの小説を出版している。

私は頭に電球を浮かべた。

「こんなのどう？ 虐められっ子の少女が自殺をしようとして学校の屋上にあるフェンスを乗り越えて縁に立って、飛び降りようとしたら別の少女が現れて止めるの。で、自殺しようとしていた少女がその少女に恋してしまい、帰り道に偶々見掛けた薬屋に入って妙な薬を買ってそれを飲んで男に成るって言う奴」

「おおっ、それ面白いアイディアだな！」

「盛り上がってる所悪いんだけど、早く食べて行かないと遅刻するわよ」

と母が割って入って来た。

私は急いで完食し、登校の準備をする為に部屋に行った。

パジャマを脱ぎ捨て、クローゼットを開けた。

中には男子用の制服が入っていた。

嘘、昨日まではセーラー服だったのに。

私は内心驚きながらも、制服に着替えた。

*

「行つてきまーす！」

私は鞆を持って革靴を履いて家を出た。

私の家から学校までは電車を利用して30分程掛かる。

駅に着き、改札を通ってホームに向かう。そこで私は、椅子に座って小説を読んで電車待ちをしている昨日の娘を見掛けた。

同じ駅だったのか。

ソツと近付いて隣に座る私、だが彼女はそれに気付いていない。御本に熱中している様だ。

私は徐に彼女が読んでいる小説の表紙を覗き込んだ。
それは<Copy soul>複製された魂――父の書いた
小説だ。

余りにも本に熱中しているので、一寸悪戯してやりたく成った私は、抜き足差し足忍び足で彼女の背後に回り込み、両目を手で覆った。

「きゃっ、急に失明したです！」

私はそのボケにウケ、プツと拭いた。

「だ、誰ですか私の目を隠しているのは!？」

私は彼女の目から手を退かして「ゴメン、吃驚した?」と訊ねた。
彼女は振り向き、私の顔面に拳をめり込ませた。

「おぶっ！」

鉄拳を制裁され、仰向けに伸びる私。何故こうなる?

「あつ、御免なさい！」と頭を下げる彼女。

「あの、つい何時もの癖で・・・兎に角御免なさい！」

言って彼女は再度頭を下げた。

「否、良いよ。気にしてないから」

「・・・優しいんですね」と彼女は微笑んだ。

「それはそうと、何処かで会った事ありません？」

「昨日、お昼休みに屋上で会ったよ」

「ああ、あの時の虐められっ子の自殺志願者の方でしたか」

酷い言われ様だ。まあ、実際そうだったけど・・・。

ホームに電車が進入し、停止線で止まってドアが開く。

「あ、電車来ましたよ」

言って彼女は電車に乗り込んだ。

発車の音楽がホームに鳴り響いた。

私は素早く立ち上がり、車内に駆け込んだ。

「座ろつか？」

私がそう言って空いている席に座ると、続いて彼女も座った。私の隣に。

ドアが閉まり、電車が発車する。

「あ、未だ名前を聞いてませんでした。私は白石 美緒。あなたは？」

「二宮 鳴海。鳴くに海って書くんだ」

「って、あれ・・・？」

「所で先刻の本、好きなの？」

「はい、私こういうの大好きなんです。この作者の本は全部揃ってますよ」

「へえ」

それは凄い。

「良かったら読みますか？」

「否、良いよ。原稿用紙に書かれたの読んでるから」

「はい？」と疑問符を浮かべる美緒。

「何でも無い」

私は父がそれを書いた事を内緒にした。だって喋ったら面倒な事になるから、絶対。

「そうですか。て言うか、昨日はジャージ着てたから分からなかったけど、二宮さんって男だったんですね」

「はあ？」

「髪が長いからてつきり女の子かと思いました」

昨日まで女の子やってたよ、なんて言えないよなあ・・・。

「じゃ、そろそろ着きますので、降りる準備でもしますか」

私は腕時計を確認した。もうそんな時間か。

電車が駅に着いてドアが開く。

私達は電車を降りた。

ホームを跡にし、階段を上って通路を渡り、一旦反対側のホームに出て改札を通って外に出る。

そこから学校までは徒歩で行く。此処から西へ真っ直ぐ行つた先に見えるのがそれ。時間は5分くらい。距離にして約333m。これは時速約4Kmで歩いた距離であるだ。

「あの、二宮さんは何年生なんですか？」

「2年生」

「それじゃあ私と一緒にですね。私B組です」

否、言わんでも知ってるから。あんた有名だし。

「あなたは何組なんですか？」

「C組」

「そっかあ。じゃあお昼休みにでも遊びに行きますね」

そう言って、彼女は一足先に駆けて行った。

その直後、背後から背中を蹴られ、私は腹這いに転んだ。

「痛・・・」

立ち上がり様に振り向くと、例の男子達が私を睨み付けていた。

懲りてなかったのか。

「おいテメエ、白石さんに近付いてんじゃないよ」

「・・・」

私は無言を返答に彼らを睨み返した。

ガスッ！――奴らの内の一人に頬を思いつ切り殴られた。けど、以前よりそんなに痛くない。男に成ったからか、疑問符。

「つかよ、オメエ髪切ったらどうだ？女みてえで気持ち悪いんだよ」
リーダー各つぱいのがそう言ってハサミを取り出した。

「としりん、それは拙いって！」と仲間の一人がそいつを宥める。

「何だよ、文句あんのか？」

「い、いえ！」

宥め様としていた奴はビビって宥めるのをやめた。

その時、革靴が飛来してリーダー各の後頭部に直撃。そいつは気絶した。

「アンタ達、また弱い者虐めしてんの？」

その声と共に、一人の少女が現れた。その少女は先程、一足先に校内へ入って行ったあの娘だった。けど、何か微妙に雰囲気が違う。
「げっ、ティラノザウルスだ！」

ティラノザウルス？

「逃げるー！」

虐めっ子の軍勢は気絶しているとしりんと呼ばれるリーダー各を担いで慌てて校内へダッシュ。

彼女は溜め息を吐いて「全く懲りてないわね」と文句を垂れる。

「えっと、白石さん？」

「ん？」と私に顔を向ける彼女。

「君は先刻、一足先に校内へ駆けて行った筈じゃ・・・？」

彼女は一旦疑問符を浮かべて、

「ああ、あれは私の妹よ」

と答えた。

「妹？」

「そう。私たち双子なのよ。因みに昨日止めたはあの娘だけど、落ちた時に助けたのは私よ」

「えっ・・・、じゃあもしかして、昨日の放課後のも君？」

この問いにも彼女はYesと答えた。

「私、白石^{シロイシ} 理緒。宜しくね」

言って彼女、理緒は握手を求めた。

ドキンッ！——私の胸が再びトキめいた。

そうか、私が好きになったのって、美緒じゃなくて理緒だったのか。しかも双子だったなんて、知りもしなかったなあ。

「どうしたの？」

理緒は私の拳動不審な態度に気付き訊ねた。

「あ、いや・・・こちらこそ宜しく」

言って私は理緒の手を握った。

「所でアンタ、名前は？」

「二宮 鳴海」

「成美・・・めんこい名前ね」

「口へんに鳥の海！めんこくなんか無え！」

「ああゴメン、成功の成に美しいだと思っただわ」

「良いよ別に」

間違つて無いから、と言つのは口にしないでおう。

「それはそうと、助けてくれて有り難う」

私はそう言つて理緒を抱き締め、頬を赤く染める彼女を尻目に、赤いそれへ唇を付けた。

チュツ！——と擬音が鳴った。

「なつ、いきなり何すんのよ!？」

彼女は束縛から抜け出して私の頬をビンタした。

「痛!」

頬に手形が付いた。

私は涙目に成つて「何するの?」と訊ねた。

「男が泣いてんじゃないわよ!」

女の子です、一応。

「全く……。普通、初対面の女の子にそう言う事する?」

や、ヤバい。怒ってる。誤魔化さないと。

「ゴメン、わたっ——」

じゃなかった。

「僕小さい頃海外に住んでてツイ癖で……」

私は申し訳なさそうに言つた。だが——

「此処は外国じゃないわよ?」

突っ込まれてしまった。

「あ、もう行かなくちゃ」

彼女はそう言つて校門に駆けて言つた。

「じゃね、虐められっ子の泣き虫さん」と残して。

ムッ、今のは流石に力チンと来たわ。後で悪戯してやる。

私は一寸した悪事を考えながら校門に向かった。

S t o r y 1・双子（後書き）

宜しければ評価・感想お願いします。

S t o r y 2 ・インキュバス（前書き）

当初予定していた作品とはまるっきり変わって、対魔アクションに成ってしまいました。申し訳ないorz・・・

Story 2・インキュバス

お昼休み。私は屋上にいた。

此処に来ればあの娘がいると思っただが・・・。

私は屋上を360度見渡してみる。

中央に椅子があつた。その椅子に一人の少女。その娘の正体は白石 美緒だつた。

体を椅子にロープで縛り付けられている。

私は彼女の下へ慌てて駆けた。

口には粘着テープを貼られ、声が出せない状態だ。

酷い、誰がこんな事？

「直ぐ解くからね」

言つて私がテープを剥がし、ロープに手を触れた刹那、例の奴らが現れた。

「来たな、つて弱虫の二宮か。お前なんかお呼びじゃねえんだよ！」

としりんと呼ばれるリーダー各が、私の鳩尾みぞおちを殴つた。

「うっ！」

私は呻き声を上げてその場に倒れた。

意識が朦朧もろうとうとする中、私の視界に女の子のシルエットが見えた。

「あんたたち、また弱い者虐め？ いい加減やめないとマジで殺すわよ」

その声は・・・理緒・・・か。

「へっ、やってみろ。こつちには人質がいるんだ。迂濶に手出しは出来ねえぜ」

としりんはそう言つて取り巻きを掃かせ、横に一步ずれた。

「美緒！？」

理緒は感嘆符を浮かべ、慌てて駆け様とするが、取り巻きの一人に押さえられた。

「おっと、近付いたらこの女の命は無え」

としりんが言うと、別の取り巻きが美緒の背後に回って首にナイフを当てがった。

恐怖で脅える美緒。今にも失神かショック死でもしそうだ。

「あんた達、一体何が目的!？」

「何って、報復だよ」

報復？理緒が何したって言うの？

「巫座戯やがって・・・!」

カルビ井大好き宇宙人が肉マークを付けるかの如く、理緒の額に赤い怒のマークが現れた。

理緒って宇宙人だったの!？——そう突っ込みたかったが、今の私は声どころか、小指すら動かせない。辛うじて機能しているのは、呼吸器官と意識のみだった。

でもその意識も段々と薄れて来ている。

「確か手出しはするなって言ってたわね？」

言って勝利の笑みを浮かべる理緒。

「じゃあ——」

「足を使おうなんて考えんなよ？ 一步でも動いたら妹はあの世逝きだ」

理緒が言おうとすると、としりんが遮るように言った。考えがバレていた。

「解ったわ。手も足も出さない」

「言ったな。二宮、お前証人に成れ」

としりんは倒れている私にそう言った。

「ようし、殺っちまえ!」

としりんが言うと、理緒を捕まえていた取り巻きが彼女の顔面に攻撃した。

微動だにしない理緒は頭突きで反撃。

取り巻きの顎に頭が当たり、そいつはショックで気絶した。

「なっ、加村が殺られた!？」

今ダウンしたのは加村と言っらしい。

「デメエ言つたよな？手も足も出さないって」

「私は物理的に頭を使っただけ、約束は守ったわ」
「凄え屁理屈だ！」

「まあ良いわ、美緒を解放して頂戴」

「ふっ、人質は解放しねえ。ま、お前が今まで俺達にして来た事を土下座して謝り、俺の舎弟に成るんだつたら考えてやっても――」

刹那、理緒の姿が皆の視界から消えた。

「何処だ！？」

としりんが言うと、此処よ、と声が聞こえた。

その方向は、美緒の後ろである。

ナイフを突き付けていた取り巻きは気絶して横たわっている。

としりんは振り向き、取り巻きの残党に命令。奴らは理緒に向かつて行つたが、またもや理緒の姿が消え、残党共が操り人形の糸が切れたみたいに次々に倒れて行く。そしてとしりんだけが一人、残つた。

「な、何なんだよお前！？」

驚き疑問をぶつける彼を尻目に彼女は間合いを詰めた。

「本当はこんな事したくないが、妹を怖い目に遭わせた罪、あのよ地獄で償え！」

地獄つてアンタツ、ホントに殺る気ですか！？

理緒はとしりんを掴んで空中に軽く投げ、残像が残る程早い速度で連続キックを繰り返した。

Hit数145。

としりんは吹っ飛び、地面を数十回程転がって漸く止やみぢまった。

「くっ・・・クッソ・・・未だだっ・・・未だ終わっちゃいない！」

としりんが言うと、体から黒い霧の様な物がにきよきよと生えるかの様に出て来た。そしてそれが猛スピードで私に近付いて来た。
「こうなつたらこいつの体に乗っ取ってやる！」

「待ちなさい！」

言つて理緒は霧を追って掴もうとするが、既の所で掴み損ねた。

霧は瞬く間に私の体内に侵入する。

「うつ・・・！」

体に痺れを感じた私は呻き声を上げた。

私は徐に立ち上がり、

「ふっふっふっふっ、身体中に力が満ち溢れて来るぞ！」

と叫んだ。

否、私じゃない。体が勝手に動き、喋っているのだ。

「その娘から出なさい！」

理緒は言って、額の怒を横にずらし、その隣に激のマークを出現させた。

激怒してるんですか？

「今の貴様に、俺を倒す事が出来る哉？」

黒い霧は私の体と声で、理緒を挑発する。

「ええ、倒してあげるわ」

言って視界から消える理緒。

「貴様の動きは見切った！」

霧に乗っ取られた私は素早く後ろを向いて、現れた理緒の攻撃を横に身をかわして空手チョップで反撃する。

首筋に強力な一撃を喰らい、脱力して地面に伏す理緒。

「そうそう、言っておくが此奴は特異点^{こざつ}みたいだぞ」

「なっ、何ですって！？」と理緒は驚いた。

「特異点だからな、生命エネルギーが底を尽きないんだ。お陰で俺のパワーは徐々に回復。貴様なんか敵じゃねえ」

「くっ・・・！」

理緒は齒を噛み締めた。

「さて、トドメを刺してやるか。あ、そうそう。命が惜しけりや一度貴様に乗っ取って片割れを置いてシモベにしてやっても良いぞ、ん？」

「あんたの手下に成るくらいなら死んだ方がマシよ。思い切って殺しなさい」

「生き残らず死を選ぶか。お前は特異点じゃないが、俺たち魔族と対等に戦える力と身体能力を持っている。シモベに出来なくて残念だ」

霧は私の口を使ってそう言い、私の右足を理緒の頭に乘せた。

「最後にもう一度問う。俺のシモベに成る気は本当に無いんだな？」

「当たり前よ」

「駄目よお姉ちゃん！お姉ちゃんがなくなったら私、私！」

美緒は叫んで瞳を潤わせ、そこから汗を垂れ流した。

「美緒、私に此奴のシモベに成れと？死んでも嫌よ。それにもしそちの道を選んだら、あんたを殺すかも知れない」

「大丈夫、そんな事には成らないわ。だって私、もうこの体に乗っ取ってるから。だからお姉ちゃんも、シモベにして貰っ——」

「お姉ちゃんと呼ぶな！」

理緒は美緒が言い終わる前に叫んで睨み付けた。

「お姉・・・ちゃん？」

「お前は妹じゃない。見た目は妹だが中身は此奴の片割れ。気安くお姉ちゃんと呼ぶな！呼んで良いのは美緒だけよ！」

理緒は言って火事場の馬鹿力を発動。私を持ち上げた。

「何んだと！？」

「落ち着いてお姉ちゃん！」

「五月蠅い！貴様にお姉ちゃんと呼ぶ資格は無い！」

理緒は完全に立ち上がり、手の平に黄色い玉つころを出現させた。
まふうたん
「魔封弾！」

理緒はその掛け声と共に、魔封弾とやらを美緒に投げ、ぶつけた。
魔封弾は美緒の体を透過し、小さな黒い霧を彼女の体から追い出して遙か彼方へ吹っ飛ばした。

気を失い、横たわる美緒。

「ほお、魔封弾を使えたか」

説明しよう。魔封弾とは体内に置かれた魔族の片割れを外に吹っ飛ばしてそいつを封じる技なのだ。この時、魔封弾を喰らった人間

に害は無い。

「後はその子からあんたを追い出すだけね」

言って理緒は目にも留まらぬ速度で接近して私の体を突き飛ばした。

私の体は勢い良く吹っ飛んでフェンスに激突する。

「ふっ、そんな事しても俺はダメージを受けないぞ」

「解ってるわ。だからこうして彼を攻撃して弱らせてるんじゃない」
私、この娘に殺されるかも。

「さあ、第1ラウンドの開始よ！」

言って彼女は視界から消え、私の目の前に出現し、私の腹に肘を
めり込ませた。

「うおお！」と呻く私の体。

「今のはとしりんの恨み！」

次に、

「此奴は取り巻きの恨み！」

理緒は反動で押し返された瞬間、私の顔面に思いつ切り回し蹴り。

「今度は二宮 鳴海の恨み！」と一旦着地し、私の顎を蹴り上げて
後方に吹っ飛ばし、「そしてっ」で跳び上がり、「私の分だあ！」
と落下する私の腹を拳で思いつ切り殴り付けた。

「がはっ！」

私が吐血すると共に、体内の黒い霧が背中から飛び出す。

理緒は空中で私を背負い、逃げる霧を掴んで真下のコンクリート
に投げ付け、避ける隙も与えずに急降下して足で踏み潰し、そいつ
を粉碎した。

溜め息を吐き、額の文字を消す理緒。

私は「楽勝ね」と調子放いた理緒の首を思いつ切り絞めた。

「何をずる！？」

「この俺、インキュバスは未だ生きてるぞ！」

インキュバスとは、先程、理緒が粉碎した筈の魔族である。

「見誤ったなっ、先刻抜け出したのは俺の片割れだ！」

嫌だ、やめて！私の理緒を殺さないで！

そう思った時、インキュバスと言う魔族が操る私の腕が緩んだ。

「なっ、俺を制御しただと！？こしゃくな特異点目！」

「どうやら形勢逆転ね」

理緒は私の腕を振り解き、回し蹴りを放ってフェンスに吹っ飛ばした。

フェンスに背中を打ち付け、衝撃でインキュバスが体内から抜け出た。

理緒はインキュバスに近付き、不適に微笑む。

「覚悟するのね」

そう言って理緒は拳を作り、インキュバスにダイレクトアタック。だが私がそれを止める。

「待って！」

理緒はその言葉に寸止めた。

「何故止める？」

「此奴に乗っ取られている間に分かった事があるんだ」

「分かった事？」

言いながら理緒は拳を引く。

「此奴、悪そうに見えるけど悪い子じゃないよ。此奴、君と戦っている時、凄く喜んでた。此奴はただ、君と遊びたかったんだよ。先刻、此奴の気持が伝わって来た。此奴、友達がいなかったから、友達に成ってくれる人が欲しかったんだよ。だからあんな事をしたんだ」

私の必死な弁解も虚しく、理緒はインキュバスをグーで殴った。でもそれは粉碎する程の力は無く、一寸痛みを感じさせる程度。

「貴様の行いは重罪だが、二宮（にみや）に免じて許してやろう」
良かったあ。

私はホッとして胸を撫で下ろす。やっぱり嘘も方便だね。

「その代わり、貴様にも魔族狩り（まぞくがかり）を手伝って貰おう。二宮、あなたは特異点だから、此奴に乗っ取られ様が片割れを置かれ様が肉体には何の影響も無い。魔族狩りの時は此奴に体を貸してやってくれる

？」

「それってつまり、僕もその魔族狩りって奴に強制参加？」

「そう言う事に成るわね」

「・・・・・・」

私の返答は無言だった。

「それより驚きだ。男の特異点に憑いて無尽蔵に作られる生体エネルギーを吸い取れる魔族はサキュバスだけの筈。二宮、お前は一体・・・・？」

この娘相手に隠し通すのは無理みたいね。告白しよう。

「実は私、女なんだ。昨日の放課後、虐められている所をあなたに助けられて、その・・・・す・・・・すす・好きに成っちゃったの！」

私は顔を真っ赤に染めるが、更に続ける。

「その後、偶然見掛けた妙なお店で妙な薬買って飲んだんだ。そして今日、男に成ってた訳」

「・・・・今何て？」

「だから薬で男に成ったと」

「その前だ！私の事を何だって!？」

「す、好いたって言ったんだよ！」

私は顔の色をピンク色に変えて点滅させながら湯気を噴かした。
もうこんな事死んでも言わねえ！

理緒も同様に、顔を赤く染める。

「いや、それは嬉しいが、お前は体だけ男で魂は女だし・・・・」

理緒は私の衝撃告白に戸惑った。

「駄目？」

「別に駄目とは言っていないけど、それある意味同性愛って訳だし・・・・」

私は拳動不審な態度を取る理緒に苛々して思いつ切り彼女を抱き締めた。
イライラ

驚く理緒。

そんな彼女を尻目に私は言葉を発する。

「私・・・否、俺はお前が大好きだ！」
効果無し。

「俺には理緒が必要なんだ！」
未だ未だ。

「お前がいなきゃ、今の俺は此処にはいなかった」

理緒のラヴ度が少し上がった。

「お前には感謝しても感謝しきれない！」

理緒のラヴ度が一気に上昇した。

「お前の事は俺が必ず幸せにしてやる！」

理緒のラヴ度がMaxに成った。後一押しすれば、この娘は完全に私の物。他の男など、アウトオブ眼中で間違い無いだろう。

「だから、俺と付き合ってくれ！」

暫し沈黙が場を支配する。そして返って来た答えは――

「・・・・・・・・」

無言だった。

脈無し、読みが外れたか、疑問符。

私は更に精神的攻撃を仕掛けた。

「理緒、あんた俺を好いてんだろ？ハッキリ言ってくれ」

途端、理緒は私の拘束を解いて飛び退き、私の股間に強力な膝蹴りを打ち込んだ。

痛いっ、物凄く痛い！

私は両手で悲鳴を上げる一物を押さえた。

「何をバカな事！アンタなんかと交際するなんて御免被るわよ！」

んなバカな！？私がそう言われたら即オツケーするのに！

「お姉ちゃんも素直じゃないね」

何時の間にか意識を取り戻していた美緒が苦笑しながら言った。

理緒は取り乱して否定する。

「な、何よ美緒まで！私はこんな奴、大大大ッ嫌いなんだからね！？」と理緒は私を指差す。

成る程、この娘はラブコメ定番のツンデレって奴なのね。それに

つり目だし。

私は思い切って理緒を再び抱き締めた。

理緒は顔を赤らめたまま言う。

「はっ、放せこの野郎！」

理緒は私の腕の中で暴れる。けど、もう放さない。

私は理緒を強く抱き締めた。

「己、私の言っている事が解らぬのか！？」

「解るけど、絶対放すもんか」

酷いよ私。

「理緒が私の事好きって言うまで放さないから」

ホントに酷い奴だ、私って。思い遣りの微塵の欠片すら感じられない。

「なっ、卑怯な！そんな事私は死んでも言わんぞ！？」

「早く認めちゃえば良いのに・・・」

そう言ったのは美緒。

「だっ、黙れ！」

ツンデレ面白いな。

「ほら、美緒ちゃんもああ言ってたんだから認めちゃいなよ」

「う、五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅い！」

「・・・あんたさ、何で認めるのが嫌なの？」

私の問いに「・・・」理緒は無言の返答。かと思いきや、

「す・・・す・・・だ」

「聞こえないって」

「だ、だからす・・・だ！」

「もっとハッキリ言ってくれない？」

「す、好きだ！私もアンタが好きだ！」

沈黙が場を支配した。

「ち、ちゃんと言ったぞ！？」

私は理緒を解放して顔を見詰める。そして、唇を彼女の唇に近付けた。

「うつ！」

理緒の膝蹴りが私の一物に放たれた。

私は悲鳴を上げるソレを手で押さえた。

「いきなり接吻せつぶんしようなんてどう言う神経してんのよアンタは！？」
「酷いよ理緒・・・。」

Story 3・理緒の誘い

その日はかんかん照りでとても暑く、一步も動きたく無かった。なのに理緒ったら、突然私を自宅近くの公園に呼び出したのだ。

「何だよ？こんな暑いのに」

私がそう訊くと、理緒は顔だけ反らした。

「あ、アンタにこれあげる」

と紙を差し出す理緒。その紙は、TS系映画のチケットだった。

「こ、この間買った女性週刊誌にサービスで付いてたのよ。アンタこう言うの好きでしょ？」

「嘘、女性週刊誌にそんな物付いて無いって」

途端、理緒の頬が赤く染まった。

「う、五月蠅い！兎に角受け取りなさいよ！」

そう言つて無理矢理、チケットを私の手の中に収める理緒。

「有り難う。所で理緒のは？」

「持つて無いわよ」と理緒は手をポケットに入れた。

ほお、そこに入ってるのか。

私はポケットに突っ込まれた理緒の手を掴み、引っ張り出して自分の手を入れた。

あつた！

私は素早くそれを取り出した。

案の定、それは私にくれたのと同じ物だった。

「一緒に観たいなら素直に言えば良いのに」

「返せ！」

理緒は私からチケットを奪い取った。

「美緒に渡されたのよ。一緒に行ったらって」

「とか言つて、ホントは自分で買ったんじゃないの？」

「・・・・・・・・」

沈黙する理緒。どうやら凶星の様だ。

「こ、今度の日曜日、駅前で待ってるから絶対来てよね！？約束よ！」

理緒はそう言って脱兎の如く去って行った。

理緒が私をデートに誘うなんて、何か夢みたい。

＊

約束の日曜日、私は待ち合わせの場所に来ていた。時刻は未だ午
前だ。

理緒のバカ！何で時間指定しないのよ！？お陰で朝が辛かったじやない！

と内心文句を垂れていると、理緒が現れた。

「スマン、時間指定するの忘れてた」

「バカ！」

私は理緒に平手打ちを放った。

だが、理緒は一瞬で避けて視界から消え、背後に出現して私の背中を思いつ切り蹴った。

「うっ！」

私は呻き声を上げ、背中を反らして押さえた。

「いきなり女の子に手え出す男があるかあ！？」

「私女の子ですけど？」

「都合が悪い時だけ戻るなあ！」

プツ——私は吹き出した。

ホント理緒って面白いなあ。からかいがいがあるよ。

「何が可笑しいのよ！？」

怒る理緒。その顔可愛いよ。

「別にいい？」と私は理緒をかえり顧みる。

「もう良い、先に行くわ」

言って理緒は私に切符を渡し、改札に向かって歩き出した。あ、
今のは偶々ね。

「一寸待つて理緒」

私は慌てて後を追い、横に着いて彼女の手を掴んだ。

「な、何勝手に手え繋いでんのよ！？放しなさい！」

言って彼女は私の手を振り払った。

「何だよ？」

「アンタと手え繋いでるの見られてカップルだなんて思われたら最悪よ！」

「え、俺たちカップルでしょ？」

と言う私の問いに理緒は、

「（最悪・・・）」

そう呟いた。

「あのね、アンタ何か勘違いしてるみたいだけど、私たちは別にカップルとかじゃないから。ただのお友達よ、オ・ト・モ・ダ・チ」と冷たい目で私を見る理緒。

「冗談でも酷いよそれ。ショックだなあ、俺。ショックの余り電車に飛び込むかも」

「好きにすれば？私は止めないから」

あれ、止めてくれないの？

Story 3・サキュバスと謎の男

とある駅前の映画館に、私と理緒は居た。
見た目はバ。オっぱい感じのボロい建物。客寄せなど到底出来そ
うに無い。

帰りたい。

私はそう思った。否、その前に突っ込もう。

「バ。オハザードかよ!？」

「二宮、突っ込まないで」

私が突っ込むと理緒に注意された。

「どうせこんなの外見だけよ。中は屹度綺麗なんだから」

その言葉を信じて、私たちは中に入った。

しかし、中は床に穴が開いているわ、蜘蛛の巣は張っているわ、

幽霊は出るわでとても酷かった。

そのお陰で客も居らず、私たち二人だけで映画を見る事になった。

上映ホールのど真ん中の席に座り、始まるのを待つ。

「なあ、理緒。そろそろ教えてくれても良いんじゃないか？」

「な、何を？」

「俺を此処に連れてきた理由。本当は退魔なんだろ？」

「な、何言ってるのよ。ただのデートよ、ただの」

「否定する所が滅茶苦茶あや・・・っ!？」

言い掛けた所で私は妙な気配に気付いた。

「理緒、感じる？」

「うん、思いつ切り」

理緒はそう言ってスクリーンの方を見た。

私も釣られてそれを見る。

スクリーンからは紫色の禍々しいオーラが放たれている。

「魔物だな」

背後にインキュバスが現れそう言う。

「しかも俺の彼女だ」

「「ええっ!?!」」

私と理緒は驚いて同時に素っ頓狂な声を上げた。

「サキュバスって言うんだ。まさかこんな所で再会するとはな。って事で体借りるぞ」

そう言ってインキュバスは私の中に入った。

「ちょ、勝手に入っ——」

私が言い掛けた所で、インキュバスに肉体の主導権を奪われてしまった。

「サキュバスちゃん」

インキュバスはそう言っでスクリーンに近付いた。するとスクリーンから「何者だ?」と言う声。

「俺だよ。インキュバスだ」

「インキュバス?」

そう言っでスクリーンから出て来る黒い影。

「お前、本当にインキュバスなのだな?」

その問いにインキュバスは頷いた。

「違う・・・」

「え?」

「お前はインキュバスじゃない!」

黒い影はそう言っで私の体をサイコキネシスで吹っ飛ばして壁にぶつけた。

「うっ!」

私が呻き声を上げるのと共にインキュバスが肉体から飛び出した。

「サキュバスの奴、何かに操られてるな?」

「どう言う事?」

「それはこう言う事だ」

その声と共に眼鏡を掛けた男が現れた。

「あいつは!」

と驚くインキュバス。

「知ってるの？」

「ああ。奴は魔物おれたちをこつちの世界に呼び出した張本人だぜ。しかも、どんな魔物でも操る事が出来る」

「それじゃあ、あいつを倒せば良いって訳ね？」

そう訊ねたのは理緒だった。

「そう言う事だ」

こいつら、一体何の話をしているのだろうか？

私にはサッパリ解らない。

「じゃあ、人間の方は私がやる。あんた達は魔物をお願い」
理緒はそう言つと、眼鏡男の懐へ駆けて行つた。

T o b e c o n t i n u e d . . .

Story 3・サキュバスと謎の男（後書き）

次回で退魔編が終わる暫定最終回。しかし、物語は未だ続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0472d/>

男に成ったんだってヴァ！

2010年10月8日21時43分発行